

総合的な学習の時間における情報端末の活用についての考察

－調べる・まとめる・発表する活動を通して－

中岡正年（和歌山大学教育学部附属小学校）

概要：4年生の児童が総合的な学習の時間において、「わかやまポンチ」について調べ、自分達の考えをまとめ、発表する活動を行った。その一連の活動の中で情報端末がどのように活用されたのかについて行動観察とアンケート調査を行い検証した。その結果、「情報検索」と「発表の練習」の場面において活用頻度が高いことがわかった。また、多くの児童が情報端末を活用することは本実践の中で有効的であったと捉えていた。

キーワード：総合的な学習の時間、グループ活動、情報端末

1 はじめに

「世界最先端 IT 国家創造宣言」において情報端末の一人一台体制を進めることが示されている。実際、多くの学校において情報端末の整備が進み、様々な実践や検証が行われている。今後ますます教育現場に情報端末が導入されることが予想される。

一方で、情報端末に限らず様々な機器が教室にあっても授業中に活用されていないこともある。機器が常設状態にないこと、機器を人数分確保できないこと、活用の場面が見いだせないことなど様々な理由が考えられる。

特に、情報端末は多くの種類があり、様々なアプリケーションを使用することでより多機能になる。しかし、この多様で多機能であることが、授業者が情報端末を授業で活用することを消極的にしてしまう一因となる可能性もあるのではと考えていた。

そこで、情報端末の活用が授業者や児童の負担にならず、児童達が授業の目的に応じて自然と活用するような場面の検証を行いたいと考えるに至った。

2 予想される活用方法

多様で多機能な情報端末ではあるが、「タブレット端末・(学習者用)デジタル教科書活用授業意図の類型化」(豊田充崇氏)によると情報端末の活用は、10種類の活用に分類される。

その類型化の中にある「情報検索・辞書の活用」と「画像・映像・音声情報の収集・記録・印刷」は本実践の「調べる・まとめる・発表する」活動を支え、児童達の目標達成に重要な役割を果たすのではないかと考えた。また、この2種類の活用方法は多くの情報端末が備えている検索機能とカメラ機能であり、新たにアプリケーションやソフトをインストールしたり、特別な操作を行ったりする必要はない。

よって、この2種類は活用に際して負担感が少ないだけでなく、授業者や児童にとって身近な活用方法であるため、本実践でも活用されることが予想された。

3 実践概要

(1) 実践環境と対象児童

4名または5名が1グループになり、主に普段、授業を行っている教室において活動を行う。その際、1グループにつき1台の情報端末(iPad mini)を活用する。

対象児童は第4学年の児童(男子14名 女子15名 計29名)であり、前学年時に本実践で活用した物とは異なるが情報端末を活用した児童もいる。

(2) 授業内容と情報端末活用場面

今回、授業の内容を大きく4つの場面に分けた。

- ①「わかやまポンチ」について知ること
 - ②オリジナルの「わかやまポンチ」を考えること
 - ③自分達の考えが伝わる発表内容を考えること
 - ④自分達の考えた「わかやまポンチ」を発表すること
- これらの学習活動を予定していることを児童達に伝え、必要に応じて授業者と相談しながら活動を行うことにした。また、情報端末だけではなく、事前に調べていた自前の資料や図書室の資料等も活用して良いことを伝えた。さらに、活動に入る前に「情報端末活用ルール」を児童達自身に決めさせ全体で共有してから活動を行った。

一連の学習活動中に観察することができた主な情報端末の活用場面は「情報検索」(図1)と「発表の練習」(図2)であった。

「情報検索」は児童も日常的に行っていることが考えられ、特に予想していたことであった。

一方、「発表の練習」において情報端末(カメラ機能)を活用することは、クラス全体で活用について確認した後、次第に広まっていった活動であった。「発表の練習」において、児童達は自分達の発表の様子を録画し、原稿を読む速さや視線、立ち位置などの確認を行っていた。また、本番の発表前には、ストップウォッチ機能を用いて自分達の発表時間の調整を行っているグループもあった。



図1 「情報検索」の場面



図2 「発表の練習」の場面

4 実践結果

行動観察やアンケート調査から、情報端末は「情報検索」と「発表の練習」の場面で多く活用されていることが確認できた。特にアンケートの回答では「情報検索」での活用と答えた割合が非常に高かった。また、児童の感想の中で「調べる時には調べて、時間をストップウォッチで測って、発表の練習の時にはビデオをとった。」といった内容の記述も多く見ることができた。

一方、児童達は情報端末を本実践で活用することについてどのように感じていたのかについては、次の2つのアンケート回答結果を参考とする。

まず、『わかやまポンチ』コンペにむけての活動で情報端末は役に立ちましたか」に対するアンケート回答結果は、「全く役立たなかった」0%「ほとんど役立たなかった」0%「あまり役立たなかった」0%「どちらでもない」7%「少し役立った」11%「役立った」61%「非常に役立った」21%であった。(図3)

次に、「情報端末を使うことで『わかやまポンチ』のコンペにむけてしっかり取り組むことができましたか」に対するアンケート回答結果は「全く取り組めなかった」0%「ほとんど取り組めなかった」0%「取り組めなかった」0%「どちらともいえない」7%「少し取り組めた」7%「取り組めた」61%「しっかり取り組めた」25%であった。(図4)

2つのアンケート回答結果から、多くの児童は、情報端末活用が自分達の学習活動に役立ち、さらに意欲的に行うことができたと捉えていることがわかった。

このような結果をもとに、本実践においては情報端末が、その時々活動を支える教具として機能し、児童達の学習活動への意欲の向上と継続に付与したのではないかと考えた。

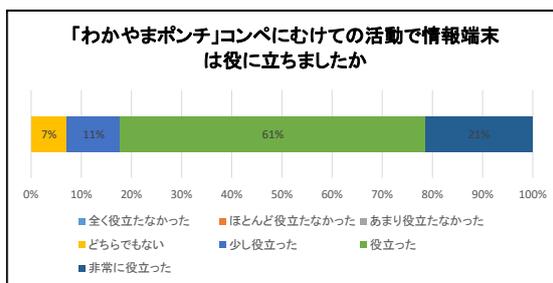


図3

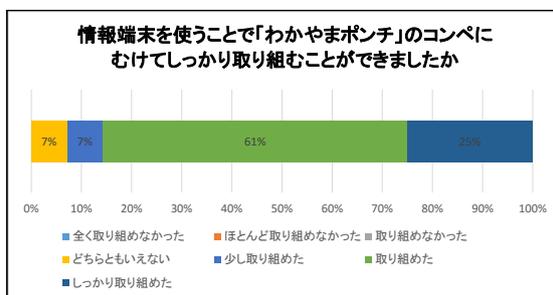


図4

5 実践の振り返りと今後の展望

本実践において、児童が情報端末を活用した主な場面は「情報検索」と「発表の練習」であった。

それらの活動を可能にした検索機能とカメラ機能は、情報端末であれば、当然のように備えている機能である。これらの機能を活用することは、児童にも授業者にも負担はあまり大きくないと考えられる。

当初はある機能を活用することを明確に提示したうえで、児童に情報端末を活用させることを考えていた。

しかし、それでは情報端末の活用が主な目的になってしまうことも考えられたので、本実践のように、児童達で活用のルールを決めさせた後は授業の目標達成のためであればある程度自由に活用することを認めた。

結果として、多くの児童達は情報端末を授業で活用する教具として認識し、目的に応じた活用をしていた。

このことは、もちろん児童が明確に学習の目標を捉え、努力したからに他ならない。だからこそ、本実践においては、情報端末は児童の「知りたい」、「行いたい」といった学習活動を支える教具となり、児童の学習意欲の向上と継続に影響を与えることになったのであろうと考えている。

今後の展望として、今回の実践で感じた指導のポイントを確認し、他の教科でも有効的な活用の場面を検証していきたい。

参考文献

「タブレット端末・(学習者用) デジタル教科書活用授業意図の類型化」

第20回 日本教育メディア学会・年次大会

(2013.10.12-13.) 豊田 充崇